

氏名(本籍)	菅原 田鶴子 (東京都)			
学位の種類	博士 (ヒューマン・ケア科学)			
学位記番号	博 甲 第 5915 号			
学位授与年月日	平成 23 年 8 月 31 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審査研究科	人間総合科学研究科			
学位論文題目	アルコール依存症者の回復と異性愛との関連についての研究			
主査	筑波大学教授	医学博士	田 宮 菜奈子	
副査	筑波大学准教授	博士 (保健学)	橋 爪 祐 美	
副査	筑波大学准教授	博士 (医学)	森 田 展 彰	
副査	筑波大学准教授	医学博士	水 上 勝 義	

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

依存症の回復の様々な時期に、依存症者が異性との葛藤や破綻を契機に再飲酒に陥り職を失うなどの不適応をきたすことが少なくない。また、“断酒から3年間は恋愛禁止”という通念があるが、異性愛が回復を妨げるか否かは実証的に明らかにされていない。そのため、アルコール依存症（以下、AI症と略）の治療で異性愛の特性と回復との関係を知ることは不可欠である。本研究では、AI症者の異性愛が回復に与える影響を検討し、助言に生かすことを目的として、異性愛の経験と意識および依存症の治療状況等を調査する。研究1では、異性愛のタイプを評価する「AI症異性愛評価尺度」の開発、研究2では、AI症に対するパートナーの姿勢の因子を特定する。研究3では、AI症者の回復と異性愛に対する関係スタッフの認識と対応の実態を明らかにする。

(対象と方法)

研究1、2：調査対象は、関東地方のAI専門の病棟や外来を持つ病院、中間施設、などを利用するAI症者のうち調査協力の同意の得られた125名。調査方法は、AI症者本人にアンケート様式。内容は、今回開発したAI症異性愛評価尺度と併せて、その妥当性をみるために、“成人愛着スタイル尺度”、“AI症の回復における異性愛関係の有用性”の質問、AI症の“否認と気づきの尺度（本人用）”、“異性愛関係における関係の満足度と重要度”の2項目の質問と人口統計学的変数、AI症および異性愛に関連する質問である。調査期間は2009年8月～12月。倫理的配慮を十分に行った。

研究3：調査対象は、関東地方の医療施設と保健所、社会復帰施設などの医師、看護師、ケースワーカー、作業療法士、心理士、保健師、ヘルパー、回復者スタッフ他89名。調査はアンケート様式。内容は、人口統計学的変数、AI症者の異性愛全般の体験や考え、指導関係、AI症のモデル事例への回答を求めた。事例は断酒期間や相手が健常者か否か等と条件の異なる診断後10年の40歳男女8例で、対応法および回復に対して異性愛が有益かを尋ねた。調査期間は2010年7月～8月。2調査とも筑波大学人間総合科学研究科倫理委員会の承認を得た。

(結果)

研究1：AI症者の異性愛のタイプを評価するために、110名の回答に因子分析を行い、第1因子を「相互尊重」、第2因子を「表面的親密」、第3因子を「嫌われ不安」と命名。各因子の α 係数は順に.82、.75、.69、全体の α 係数は.63で信頼性は得られた。成人愛着スタイル尺度との併存的基準関連の妥当性、異性愛への関係の満足度・重要度、「AI症の回復における異性愛関係の有用性」は基準関連の妥当性が得られた。他方、「否認と気づきの尺度」は「本人の変化」と「相互尊重」に正、「本人の気づき」と「嫌われ不安」に正の相関がみられた。

研究2：AI症に対するパートナーの姿勢の因子を特定するために、71名に対して因子分析を行い、第1因子を「無関心」、第2因子を「受容」、第3因子を「過敏」と命名。各因子の α 係数は順に、.74、.82、.60で信頼性は得られた。妥当性は、異性愛関係への満足度および重要度と、「AI症の回復における異性愛関係の有用性」について基準関連の妥当性が得られ、否認と気づきの尺度では、「無関心」は「否認」に正、「気づき」と「変化」に負、「受容」と「過敏」は「気づき」に正の相関が認められた。

研究3：AI症者の異性愛と回復についての関係スタッフの認識と対応の検討は89名に行った。男女比は2対3で、40歳台が多数を占め、医療関係者が4分の3、うち半数が看護師だった。

全体では、AI症者の異性愛は尊重するが再飲酒の危険を強く危惧するという結果だった。回答者の7割が苦慮した経験を持ち、半数は、断酒から3年間は恋愛禁止、異性愛は断酒の妨げになる、AI症者の恋愛は止められない、異性愛に回復指導ができることを肯定した。恋愛や婚姻が回復にプラスに働くかは、双方が依存症の場合は支持が低かった。

異性愛のモデル事例は、退院から1年半未満は「介入」、1年半以上は「尊重」、また6割以上が全事例に「再飲酒危険」を指摘した。懸念的な回答が多いのは、入院中の既婚女性の恋愛の事例で、支持的が多いのは、退院後5年の就労中の男性でパートナーへ依存症を未告白の事例だった。断酒期間が長い、就労中、一方が依存症等が主に再飲酒懸念の低い要素だった。

スタッフの背景の違いでは、退院後1年半までの事例では、男性よりも女性に「介入」が多く、医療系はその他よりも全般的に異性愛を尊重する一方で再飲酒を強く懸念していたが、その他のスタッフは退院直後のみは再飲酒を強く懸念していた。平均年齢が低く、AI症ケア経験年数が短い者は、異性愛の指導は消極的で、効果的に行えない認識だった。適切な指導法があれば活用したいとの回答が多かった。考慮項目は、断酒状況、断酒から3年以上か、自助グループへの参加状況が上位、自由記述結果は、個別事例では、離す、助言、支持の3領域だった。

(考察)

AI症異性愛評価尺度は、下位尺度が「相互尊重」「表面的親密」「嫌われ不安」の3因子で信頼性と妥当性が得られ、妥当性は回復段階とは一部に重要な関連が得られた。当尺度は異性愛が回復に有益か妨害的か、および、異性愛の満足と重要性をスケールを通して測ることを目的とする。成人愛着尺度、関係の満足度・重要度、「AI症の回復における異性愛関係の有用性」について基準関連の妥当性が得られたことにより妥当性が証明されたと考えられる。

本人からみたAI症者に対する異性愛のパートナーの態度因子は「無関心」「受容」「過敏」が抽出され、信頼性と、異性愛関係への満足度と重要度、「AI症の回復における異性愛関係の有用性」で基準関連の妥当性が得られた。また、否認と気づきの尺度の「否認」と「無関心」、「気づき」と「受容」「過敏」に正の相関が認められ、有用性と回復段階の関連をある程度把握しうるツールであることも証明された。

異性愛と回復に対するスタッフの認識と対応は、全体的にはAI症者の異性愛は尊重するが再飲酒を強く危惧する傾向がみられた。“断酒から3年は恋愛禁止”という完全に否定的な通念とは異なる結果が得られたことは、有効な対応を考える上で意義が多いと考えられる。断酒期間の短さ、未就労、双方が依存症、依

存症を未告白、婚姻外恋愛、回復初期の人との恋愛等が加わると、再飲酒の危険がより高いという認識は、アプローチのあり方に具体的な示唆を与える。年齢やケア経験の低いスタッフからの指導への不安や医療系と外部スタッフの対応の違いが明らかになったことも、今後のケア上重要である。

(結論)

本研究から AI 症の回復過程と異性愛との多様な関係が明らかにされた。結果をもとに次のような AI 症異性愛カウンセリングのモデルが考えられる。「相互尊重」のカップルでは現状を続行し、「表面的親密」では自分のありのままを出せるように、「嫌われ不安」では少し距離と時間を取り自分を大切にするような助言を行うことが望ましい。AI 症者に対するパートナーの態度を指標とすると、「受容」傾向では受容が行き過ぎずに現在の態度を続け、「無関心」傾向では関係を止めるか相手に依存症への関心を持ってもらう工夫をして、「過敏」傾向ではパートナーが自分の人生を楽しめるように助言することなどが有効だと考えられる。これら 2 つの尺度を組み合わせた検討はより指導に有効であろう。スタッフの認識の調査から“断酒から 3 年は恋愛禁止”という通念は現状を反映していないことが明らかになった。断酒状況や異性愛の相手との関係が異なるモデル事例への援助者の反応では、断酒期間、就労状況、パートナーに対する依存症の告白状況、一方か双方が依存症かの場合、重複した異性交際の場合などの違いによる回復への影響の差が明らかになり、事例の特性に合わせた対応方法が推奨される。

審 査 の 結 果 の 要 旨

平成 23 年 6 月 7 日、博士（ヒューマン・ケア科学）学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと最終試験を行い、論文について説明をもとめ、関連事項について質疑応答を行った。

臨床経験における“断酒から 3 年間は恋愛禁止”という通念への疑問を緒として、異性愛が回復を妨げるか否かを実証的に明らかにすることを目的として取り組まれた精力的な研究である。実証のための尺度作成から始め、実態分析、さらに職員の通念にも切り込み、幅の広いヒューマンケア科学らしい意義のある研究である。審査委員会では、論理の展開の飛躍、科学的記述の不備などが指摘されたが、その後、これらの修正内容を確認し、審査委員全員によって合格と判定された。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。